「ここは、傘の雫が掛かる島なのです」

函館市医師会
函館渡辺病院
水　関　　清

19世紀末葉に欧米人がThe Inland Seaと呼んだ瀬戸内海には、700ほどの島が点在する。その西南部に位置し、九州の大分・宮崎両県と四国の愛媛県が向かい合う「宇和海（うわかい）」と呼ばれる海域には、リアス式と呼ばれる沈降海岸が見られる。屈曲の激しい複雑怪奇な海岸線が続き、なぜ島にならなかったかと思うほどの、細く長く伸びた半島が入り混じる。

島であっても、半島であっても、山と山の鞍部が形づくる入江が抱く、わずかな平坦地が広がる場所に、目地の漆喰が白い瓦屋根の集落が密集するという特徴は、共通である。集落を縫うようにして走る、見通しの悪い細い海岸道路を挟んで、小さな岸壁とそれに付随した浮桟橋がある。民家の軒と軒の間に挟まれるようにして、細い道が、たどたどしく背後の山へと向かう。登り坂をたどった先には、丹念に石を積み上げて築いた段々畑があり、蜜柑や薩摩芋、そして日々の食卓に添える野菜等が育てられている。

宇和海の、愛媛県に属する海域には10ほどの有人島が点在し、千人に満たない規模の人口を、背後に迫る山塊で隔てられた、いくつかの浦々で分かち合っている。陸上交通は難路の連続で、集落の中心部を結ぶ船便が便利である。船便が運ぶ本土からの物資以外は自給自足の島の生活。宅配便もタクシーも、救急車を呼んでも島の中にはやって来ない。海岸に点在する集落には、小さな診療所があるが、医師は常駐せず、複数の診療所を掛け持ちで担当する。医療機器も最小限のもののみで、住民が画像診断などを受ける機会は限られる。

どんなところで暮らしていても、人々が暮らすところには、多様な医療需要があるが、その密度が希薄で、医療従事者の常時配置が困難な場合にどうするか。そうした島では、予防医学が重視されるという観点から、地元駐在の保健婦活動と連携した、巡回診療船事業が続けられてきた。岡山済生会病院・大和人士院長の指揮のもとで、昭和37年に開始された「海をわたる病院」事業がそれである。今から45年前のこと、そうした「海をわたる病院」の現場を、医学生の眼で見つめる機会を頂いた。夏休みの一時期を、面積3.9km²、当時の人口約700という、宇和海の離島・日振島で過ごしたのである。

細長い島の西側は断崖が連なり、東側には岬に隔てられた３つの集落がある。はるか承平の昔(935年頃)、「伊予掾」として赴任した藤原純友が、海賊の一団を率いて出没したのは、この日振島のある海域である。島には純友が築いた砦や海賊たちが使用したという井戸が残る。当時は、本土からの送水管が敷設される前の時代で、島の水は、高価な海水淡水化装置によって得ていた。この井戸も、「純友さんの井戸」として、軒を寄せ合う集落で使う生活用水の供給源として、なお現役であった。

島に一軒だけの旅館は、純友にちなんでその名も「海賊荘」。診療船の主役である医師や看護婦たちはここに宿泊し、私たち医学生の宿はその奥にある潮風に晒されて軒が白く反り返った寺のお堂であった。

「海をわたる病院」の活動に戻ろう。昼間は、医師の診察介助をし、撮影された医療画像をまとめて整理するなどの業務を担い、夜は、駐在保健婦・医師・島民の方々との懇談の場に陪席するのが、私たち医学生の仕事であった。漁師の一日の仕事開始に合わせて、採血などの検査は早朝から始められる。医師の診療は、漁師が沖から昼食のために帰ってくる時間に集中的に行われる。午後は、漁師の家族や、現地駐在の教員、警察官、公務員などが受診され、夏の陽が海面に近づく頃に、やっと１日の業務が終了する。

中でも、八面六臂の駐在保健婦活動には目を見張った。すなわち、年１回の診療船の定期巡回事業の際には、毎日島民の暮らしの場に出向く中で蓄積した島民の健康情報を、担当医に要領よく伝えて健診の質を向上させ、場合によっては適切な二次検診につなぐ、という重責を担っていた。そこには、診療船の定期巡回事業の一端を担いつつ、島民が「自分の体は自分で守る」という予防医学の考え方を浸透させるという、実務としての保健婦活動が、理念と無理なく溶け合ってひとつになり、しっかりと根付いていたのである。

そんな一日の終わりに、お堂の外に設えられたのが、沸かした海水をドラム缶に満たした露天風呂であった。慎重に踏み板を踏んで、火傷せぬように入ったこの日の湯の感触は今も鮮やかである。

一浴してお堂に戻って、夕食をとった。一日中一緒に働いて気心が知れた、件の50代のベテラン保健婦さんも同席していた。週１回、診療所に医師が巡回する日には診察介助をするが、それ以外は、ひたすら人々のもとを訪れて血圧を測り、家で食べる味噌汁の味を確かめ、体調の良しあしを聞いて回る。急患があれば、本土の医師に連絡して時には応急処置をするという。島に一人しかいない医療職として、懸命に担い続けてきた職責の重さを語り、この島には犯罪がなく、どの家も鍵をかけないと、ひと通り島を褒めた後、ポツリと漏らした一言は、さらに忘れがたい。

「ここは、傘の雫が掛かる島なのです」